



「ちがいが」をつなぐコーディネーターの軸を手に入れよう

〓他人事から自分事へ、市民自治に向かって〓

三月四日(土)五日(日)に、大野城まどかぴあ(福岡県大野城市)で、認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会(以下JVCA)主催の「全国ボランティアコーディネーター研究会二〇一七」が開催されました。二日間に「さわやか」から貞谷が参加しました。全国各地より二五〇名の参加がありました。

九時三十分から分科会がありました。

十一の分科会で構成され、その中の『ボランティアコーディネーターの【ゆらぎ】を【強み】に変えるために』と『ゆらぎ』という経験こそ、社会福祉実践の原点

これから私たちが目指す

この分科会は、ボランティアコーディネーターとしての悩みや不安感を解決するために、『ボランティアコーディネーター基本指針』を使って、日々のコーディネーションを振り返りながら、これから私たちが目指すコーディネーター像を再確認することを目的としています。



東京都杉並区
社会福祉協議会生活支援課
生活相談係長 足田恵子 氏

ボランティアコーディネーター基本指針 ～追求する価値と求められる役割～

■1 ■ どのような社会をめざすのか
ボランティアコーディネーターは、なぜ人々に社会参加を呼びかけるのでしょうか。なぜ、ボランティアや市民活動団体を支援するのでしょうか。また、組織やプロジェクトへのボランティアの参加をうながし、目標に向かってともに活動しようとするのでしょうか。それは、多くの人々の参加と行動によって実現していきたい【社会像】があるからです。一人ひとりの【市民】が自らもつ力を発揮し合ってこそ実現できる社会、恒常的に改革をつづける社会、それを「市民社会」という言葉で言い表しても良いかもしれません。どのような社会をめざすのか。私たちがめざす「市民社会」の要素を表します。

■2 ■ どのようにボランティアをとらえるのか
ボランティアコーディネーターにとって何より重要なことはボランティアおよびボランティア活動の本質をどのように理解するのかということです。ボランティア活動は、一般的に「自発性」「連帯性」「無償性」などという言葉で説明されますが、コーディネーターがボランティア活動をどのようにとらえているかは、日常のコーディネーションのあり方と質を左右する重要な要素です。ボランティアに対する私たちの認識を具体的に表現します。

■3 ■ どのようにボランティアに向き合うのか
ボランティアコーディネーターは、ボランティアや活動を希望する人たちに、いかに支援し、協働することが必要なのでしょうか。どのようなスタンスでボランティアと向き合い、かかわりをもつべきなのでしょうか。ボランティアコーディネーターがボランティアと向き合う基本を具体的に表します。

■4 ■ どのようなボランティアコーディネーションを行うのか
ボランティアコーディネーションとは、どのような視点をもって、どのようなことが行われるべきなのでしょうか。ボランティアコーディネーターの役割と専門性について理解いただくために、ボランティアコーディネーションとは何かを具体的に表します。

正田氏は「ボランティアコーディネーターに関する社会的な認知は、残念ながらまだ十分に広がっていません。その為にJVCAでは、二〇〇四年九月八日に『ボランティアコーディネーター基本指針』追求する価値と果たすべき役割』を作成し、発表しました。

東京都杉並区社会福祉協議会生活支援課の足田恵子生活相談係長が務められました。『ゆらぎ』という経験こそ、社会福祉実践の原点であると捉えるのです。『ゆらぎ』ということ自体は、強みに繋がる可能性があるので、『ゆらぎ』という

の著書『ゆらぎことのできる力・ゆらぎと社会福祉実践』の中から、皆さんに伝えたいことがあるので紹介します。『ゆらぎ』とは、実践の中で援助者や相談者、家族などが経験する動揺や葛藤、不安などを表します。筆者は、『ゆらぎ』という体験から何かを学ぶことによって、その専門性や技術を高めることができると思っています。つまり、『ゆらぎ』を単に否定し、排除すべきものと捉えるのではなく、『ゆらぎ』という経験こそ、社会福祉実践の原点であると捉える



ことを前向きに考えて捉えたいと思っています。また、ボランティアコーディネーションの現場で体験している『ゆらぎ』を感じ、自分の『ゆらぎ』のポイントを明らかにし、今後の対応に活かすヒントを見つけれられるような時間になればと思っています」と話されました。

続いて、四班に分かれてグループワーク①を行い、自分がゆらいだ場面をポストイットに書き出し、グループ内で共有し合いました。

社会的な認知は十分ではない

十分ではない

基本指針とは、ボランティアコーディネーターに必要な価値観やコーディネーションの視点について、活動する分野や立場を超えて、共通する要素を明らかにしようとするものです。組織の中での位置づけがあいまいであったり、役割が理解されなかったりという現状があります。その一方では、ボランティアコーディネーターという言葉が安易に使用される傾向も見られるようになってきました。

常に念頭におこう

そこで今、『ボランティアコーディネーター基本指針』を四つの視点に沿って明確にし、文章にまとめ、広く発信していくことが不可欠だと考えました。

この四つの基本的な問いを常に念頭におきながら、自分自身や職場の業務を進めたり、見直したり、また、改めてボランティアコーディネーションのあり方を考え、話し合うきっかけにしたいだけだと思っています。ここで、ボランティア基本指針(詳細は左の枠に掲載)を紹介いたします。

(裏面へつづく)

あらゆる分野に共有して追求する

“価値”と“果たすべき役割”とは

あらゆる分野のボランティアコーディネーターが、共有して追求する価値と果たすべき役割があると思います。

持つべき知識や技能は、専門性が高まるほど分野や機能による個性が出てくるものと思われませんが、ここでは分野を超えて共有できる要素を掲げています。専門性を明らかにして

幅広い人々に理解を

ボランティアコーディネーターがその組織において、専門的な役割を持ったスタッフとして位置づけられ、その業務が必要不可欠なものとして認知されるためには、ボランティアコーディネーターが持つ専門性（価値・知識・技能）の中身を明確にし、幅広い人々に理解していただくことが重要だと思っています。

ボランティアコーディネーターの基本的な指針を明確に文化することで、私たちの意識や仕事を狭い枠に閉じ込めることにならないかと不安な声もあります。私たちの専門性を明確にし、

社会的な認知を進めていくためには、この作業が必要不可欠な段階だと考えます。現場の人たちの声を

実質的なものにした

また、『ボランティアコーディネーター基本指針』を定めることで、一人ひとりのボランティアコーディネーターが、それぞれの現場で生き活きと働ける環境

に繋がっていくことが大切だと思っています。

そして、これまでに寄せられた、たくさんの方々の要望や悩み、さらには新たな意見交換を重ねながら、「コーディネーターが元気になる」ための基準を作っていました。

次に、グループワーク②として、自分の『ゆらぎ』に関する基本指針を見つけて、自分のゆらぎやすいポイントや、その時の対応の仕方などを振り返り、グループ内で共有しました。

移送サービス、温故知新

改正道路運送法施行から一〇年

三月五日（日）東京の飯田橋セントラルプラザの一〇階会議室で、東京ボランティア・市民活動センターと東京ハンディキャップ連絡会主催の「移送サービスのつどい二〇一七」が行われました。今回の参加者は三十二名で、「さわやか」から山田と高原が参加しました。

初めに、東京ハンディキャップ連絡会代表の荻野陽一氏から「改正道路運送法施行から一〇年が経ちましたが、振り返りながらも一度確認し、さら

に今後の一〇年をどのようにしたら良いのかをいろいろの角度からお話していただき

と思います。



移送サービスのつどい

東京ボランティア・市民活動センター

今日一日よろしくお願致します」と挨拶がありました。午前の部として、法令化の一〇年を機に改めて、日本の移送サービスの歴史を振り返ってみようかと二名の方の話がありました。

最初に「移送サービス誕生秘話」記録誌編纂の取り組みから見てきたもの」と題して、東京都社会福祉協議会福祉部高齢担当の藤原孝公氏の話がありました。次に、前東京ハンディキャップ連絡会代表の阿部司氏から「移送サービス法令化の取り組みとその後の評価」として話がありました。

お昼の休憩後、午後の部は、法令化一〇年の実績と今後の展望についてテーマごとに考えようと、コメントーターに中央大学研究開発機構の秋山哲男教授を迎え、リレートーク「移送サービス」のこれまで、そしてこれからと題して、四つのテーマに沿って五名の方の話がありました。

最後に、小谷広幸実行委員長から「この二日間のために一年をかけて色々な企画をねり、無事に終える事ができ、感謝しています」と挨拶がありました。

最後に、正田氏は「『ゆらぎ』を見逃すと、きつかけを失い、強みまで失う気がします。『ゆらぎ』を素直に受け入れてほしい人との対話の中で、強みになることに気が付ける力をもって、『ゆらぎ』を素直に受け入れてほしい」と題して、分科会での研究協議を踏まえ、集会のテーマでもある『他人事から自分事へ』と市民が変化するきっかけや場づくりへのヒントを共有しました。

また、コーディネーター自身にとって、明日からのコーディネーションの軸となるものを確認し合い、クロージング全体会は終了しました。

また、来年の三月に開催される長野県長野市の実行委員の方から「来年は長野県でお会いしましょう」と挨拶があり、研究集会は十五時三十分を終了しました。

